

XenosagaI・II - 第十二話 家族 - Familie - 下

ウヅキ家

ジン：――いらっしゃい。粗末な家ですが、くつろいでいてください。

Jr.：おい、ケイオス――この家、レプリカじゃない。本物の木造だぜ――

ケイオス：うん、それに見てよ。すごいや、本屋だよ、ここ。

（何百年ぶりだろう――）

Jr.：すげえー、超骨董！ ガイナンの奴も連れてきてやるんだったぜ。

シオン：――やっぱりね。

ちょっと兄さん、これどういうこと？ 医者はじめたんじゃなかったの？

ジン：なんですか、お前は。実家に戻ったら、まずはただいま――ってのが普通でしょ。

シオン：その実家が普通ならね。

――で、どうしたの？ まさか、また飽きて商売替えした――なんて言うわけ？

もう、半年と続いたためしがないじゃない。

ジン：このご時世、医者はね、ご近所のお年寄りの話し相手が主な仕事なんですよ。

要するにメンタルケア――

第一、頭の病以外は全部、薬とナノマシンで治っちゃうんだから、他にすることがない。

だったら、なにもわざわざ設備投資のかかる医者などしなくても、

別の商いでもお話はできる。なにより、売る物があればその分得かな――ってね。

シオン：なにが、得かな――よ。単に自分の趣味を、税金対策の対象にしたかっただけじゃない。

医者だったって、どうせたいした設備入れてなかったんでしょ。

大体なに、この本の山？ こっちの方がよっぽど投資がかかるじゃない。

いったい全体、これだけの本、どっから集めてきたのよ。

ジン：ここの半分は、お祖父さんの蔵の中に眠っていたものですよ。

お前だって、子供の時分に見たことぐらいあるでしょう。

後の半分が、お客さんから。好事家の方々も多くてね。蒐集には事欠かないんですよ。

――で、そんなことよりほら、まずお客さんを――

シオン：――え？

ああ、そうだ。実家のあまりの変貌ぶりにすっかり忘れてた。

ケイオスくん、Jr. くん、遠慮せずに上がって。

――って、なにやってるの？

Jr.：え？

いや、こんだけ買ってこうかな――って。

ケイオス：そ、それじゃあお言葉に甘えて ほら、Jr. ー

Jr.：えーっ、だってこれよおー

ケイオス：後で好きなだけ買えばいいでしょ。ほら――

Jr.：わ、わかったよ――

－ 

セラーズ『プレロマだが、廃棄処分としておいた。

連邦の手垢がついたものを放置しておくわけにはいかぬのでな。』

???『――承知した。迅速な手配と理解しておこう。さすがは秘跡省長官補。』

セラーズ『もっとも、地球圏脱出時の移民船の名を冠した要塞だ。

歴史ある名を処分されることに対してマーグリス審問官長の感傷も考慮に入れるべきだったかな。』

マーグリス：くだらんな、セラーズ。老人の酔狂によってつけられた名だ。

その程度の物がどうなろうと、俺の知ったことではない。

セラーズ『老人の酔狂――か。貴様らしい、物言いだな。』

マーグリス：くだらん話はそのくらいにしておけ。異端審問官長とその総帥が、秘跡省長官補と密談しているのだ。

老人はともかく、庁の者どもに嗅ぎつけられるわけにはいかん。

???『マーグリス、第二ミルチア自治政府――複数の E. S. を使い出したそうだな。』

マーグリス：はっ、異端審問官二名が不覚をとりました。

総帥のお耳を汚した罪の深さを、痛感いたしております。

セラーズ『ほう、ならば旧ミルチアへの道を拓くことが、より急務となったわけだな。』

マーグリズ：貴様に言われるまでもない。その件に関しては、まだ有効な手駒が残っている。

???『いいだろう。では、私は新たな展開を待つことにしよう。』

セラーズも、審問官長の手並みを見分しておくがよかろう。』

セラーズ『承知した。それではご両所ともご機嫌よう。』

マーグリズ：（我らが総帥――その思惑を知ったとき、老人はどう動くかな――

むしろ、いま警戒すべきはセラーズ――

あの男が獅子身中の虫とするならば、いずれは俺の手で――）

－ 

ジン：――話はだいたい、呑み込みました。で、彼らの手伝いをしたい――と。

シオン：――うん。

ジン：そいつは感心できませんねえ――

聞けば彼らは、その道のプロのようじゃないですか。素人が首を突っ込むことじゃない。

シオン：素人って――私だって、けっこう役に立ってんだから。

――ねえ。

ケイオス：ええ、シオンの言うとおりで。

ジン：――

まあ、とにかく今日はゆっくり休んで、明日にでも、父さんと母さんのお墓参りに――

シオン：ちょっと待ってよ、兄さん。またその話――？

私は行かないって、前から何度も言ってるでしょう！

いやよ、絶対行きたくない！

ジン：お前はそう言うけれど、やはり子の務めとして、両親の墓前に花の一つも供えてあげないと――

シオン：やめてよ！

それに何が墓前よ――あのお墓の下には、父さんも母さんもいないじゃない！

二人がどこにいるのか、兄さんだって知っているでしょ！

そうよ！

あの時、あそこにいたのは、私と兄さんだけだった――

兄さんが、兄さんが――もう少し早く来てくれれば！ 父さんも！ 母さんも！――
――――！

ご、ごめん――そんなつもりじゃ――私――
でも――

やっぱり、お墓には行きたくない。

ジン：――――

－ 

??? 『ほう、つまりご主人さまの機嫌を損ねたくない飼い犬としては、もう一度、力を借りたいというわけだ。』

マーグリス： 図に乗るなよ。

みすみす天の車を失っておいて、なにも得るものがなかった貴様に、言えた義理ではないはずだ。

アルベド『まあ、そう言うな。こっちにもいろいろと、予想外のことがあったんだ。

だが、すでに仕込みはすんでいる。もうじき、飼い主にいい報告ができるだろうぜ。』

マーグリス： 虚言でないことを期待しよう。貴様も、いつまで余裕を保ってられるか、知れたものではない。

第二ミルチア自治政府が新たな E.S. を運用しはじめた件、聞いているであろう。

ザルヴァートルが関与している可能性、否定できん。

アルベド『――あんたも、ディミトリ・ユーリエフに怯えているクチかい？』

マーグリス： ――生きているというのか、あの男が？

アルベド『まさか――俺はこの目で見た。

”処刑人” が、実の父を手にかける瞬間をな――』

マーグリス： ならば、なにも怖れる必要などあるまい。

死者にできるのは煉獄から生者を呪うことだけだ。

アルベド『んん？

――くくくくく。

――ひゃっはははは！

あんまり、あの男をなめない方がいいぜ。

たしかに、ヤツは殺された。だがな――

あのクソ親父が、おとなしく死んだままでいるタマかよ――！』

- 

Jr.: じゃ、俺そろそろ――軌道上のことも気になるし――

ジン: すみませんでしたね、お恥ずかしいところをお見せしちゃって。

Jr.: いえ、そんな――大丈夫ですか、シオン。

ジン: ーご心配なく、これでも血を分けた兄妹ですから。

Jr.: (血を分けた兄妹、か――)

ケイオス: ごめん、僕は残ってもかまわなかな？

もちろん、ジンさんがよければの話なんですけど――

ジン: ええ、私はかまいませんよ。

ぜひ泊まっていてください。シオンもきっと、喜びますから。

Jr.: そっか、んじゃ俺んところは気にすんな。

モモの解析はしばらく先だし、それまでに戻ってきてくれればいいぜ。

ケイオス: うん、ありがとう。

ケイオス: ーこちらでしたか。

ジン: いい声でしょう。眠れない夜は、ここが一番落ち着くんですよ。

ケイオス: シオンさん――部屋にいませんでしたね。

ジン: ええ、あれはあれで、やはり眠れないなのでしょう。

ケイオス: そうですね――彼女もたくさんのものを抱え込んでいるから。

ジン: ーあれとは二年ぶりでしたね。

まだまだ子供だと思っていたんですが、なかなかどうして――

あの性格は、祖父ゆずりかな？

ーで、なにをお話すればよろしいのでしょうか？ 話があるから、残られたのでは？

ケイオス: あの――ジンさん、もしかしたらまだ、U-TIC 機関のことを――

ジン: その件ですか――

あの戦場であなたと出逢ってから、もう十四年――

長いようでいて、実は昨日の出来事だったんだな、あれは――――
どうも私は、その呪縛から逃れられない運命のようだ。

否、自ら招いたのか――

狩猟採集民として、その歴史をスタートさせた人類は、
やがて火を操る術を見だし、その火から刃を手に入れた。

未来を模索する意識は時と共にその姿を変えていき、

そこに灯明を見いだした時、人は――その本来の存在を忘れ、奔走する。

思えば、私たち人類は――燭光に誘われ、舞い寄る羽虫のようなものなのかもしれません。

その先に待っている結末も知らずに――

ケイオス： ジンさん――

ジン： あれが、色々にご迷惑をおかけしたようですね。

つたない妹ですが、これからもよろしくしてやってください。

ケイオス： そんな――

ジン： 私はあれが”もっとも辛い時期”にそばにいてやれなかった。

そして、それを引きずっていまだに近くにいてあげることができない――

怖いんだな、きっと。

いま以上近づいたら、自分は家族として、兄として、認めてもらえないんじゃないか――

そんなことを怖がっているんです。

ケイオス： シオンさん――よく、あなたのことを口にするんです。

それって、あなたのことを大事に想っている――そういうことだと思いますよ。

ジン： で、その後に”だめな兄貴”――って接尾語がつくんでしょう。

ケイオス： まあ、たまには――

ジン： ふふふ――しかし、不思議ですね。

あなたにはなんでも話せそうな そんな気持ちになる。

私よりはるかに老成されているよな何百年も生きているような――そんな雰囲気すら感じます。

ケイオス： ――まさか、単にのんびりした性分なだけですよ。

だから Jr. にはいつも せっつかれています。――お前は”とろい”ってね。

シオン：――兄さん。
――兄さんが悪いのよ。私だって、あんなこと言いたかったわけじゃないのに――
――あら？
アレン：――――あ。
主任！
シオン：アレンくん、どうしたの？ こんなところで――
アレン：あ、その――仕事終わってホテルに戻ったんですけど、なんだか眠れなくて――
その――主任の故郷の街って、どんなかなあって――
シオン：ねえ、アレンくん――
アレン：は、はい！
シオン：ちょっと――つきあって。

――

アレン：――す、素敵な公園ですね。
（こ、こんなところに誘ってくれるなんて――）
シオン：昔ね――
嫌なことがあると、いつもここへ、星を見に来たんだ。
でも、不思議――
今夜は星じゃなくて、曙光しか見えないわ。
アレン：――ほんとですね。こんな低軌道に定位するなんて、珍しいこともあったもんだ。
シオン：故郷の空に、いま住んでる人工惑星が見えるなんて、めったにない経験よね。
アレン：――主任、なにか嫌なことでもあったんですか？
シオン：え――なんで？
アレン：だって、ここに来るのは、嫌なことがあったとき、だったんじゃないんですか？
シオン：そっか、さっきそう言ったよね。

――――――

よく考えたら、そんな嫌なことなんて、なにもなかった、のよね――
KOS-MOSはちゃんと予定通り二局に引き取られて――
私は懐かしい惑星[ほし]に帰ってきて、家族に会えて――
なんにも――嫌なことなんて――みんな、たいしたことない――

アレन：主任――――

あ、そうだ、主任――

僕、主任に自分の家族のこと、話したことありましたっけ？

シオン：え、そういえば――聞いたことなかったかな。

アレン：ええ、話したことなかったですから。

――僕のうちですね。けっこう大家族なんですよ。

父の会社を興した祖父母と一緒に暮らしてて――

父は仕事ばっかりの人間で全然、子供と遊んでくれるようなことはなかったんですが、

趣味の釣りだけは別で、釣りをするときだけ、僕や兄さんたちの面倒をマメに見てくれて――

母さんは――母は、料理が苦手で一度も食事を作ったことがないくせに、

掃除だけは大好きで、屋敷中、自分の手で、磨き上げないと気が済まないタチで――

兄さんたちはみんな、父の跡を誰が継ぐかで必死になってて、

でも、そんなレースには興味ない、末っ子の僕にだけは優しくて――

シオン：――――――

アレン：あ、すみません、長々と自分の話をしちゃって――

シオン：ううん、それはいいんだけど――

アレンくんのうちって――

アレン：けっこう幸せそうに聞こえるでしょ。

シオン：う、うん――

なんだか、資産家らしいってのは噂で聞いてたけど――

でも、アレンくんの話だとなんか楽しそうな家で――

アレン：――でも、あそこが僕にとっては、牢獄だったんです。

シオン：――――――

アレン：みんな、いい人だったんだと思いますよ。真剣に、僕のこと、考えてくれていた。

そして、真剣に僕を、世間の荒波から遠ざけようとしてくれていた――

シオン：アレンくん――

アレン：でもね、僕だって、男なんですよ。

自分の力で荒波を渡ってみたい――そんな風に思う年頃があるんです。

――って、いまでも思ってますけど。

だから、奨学金でボロメオに行って、自分のやりたいことを勉強して、ヴェクターを目指したんです。

シオン：――――

アレン：いまでも、正直言って、僕――あんまり家族が好きじゃないんですよ。
――だからね、僕には、主任に”悩むな”なんて、とても言えません。
ただ、自分の悩みを、”たいしたことない”なんて、言わなくてもいいと思うんですよ。

シオン：アレンくん――

アレン：いまでも、何度も言われたんですよ。
”お前のはボンボンのワガママだ。そんなのは本当の悩みじゃない”――ってね。
でも、僕は僕で、いつも僕の悩みと戦ってるんです。だから、他人に僕の悩みを
”たいしたことない”なんて、言わせたくない。そして――
僕、知ってます。主任がいつも、どんなに頑張ってるか。
だから主任も――たいしたことないなんて言わないで、ゆっくり悩んでください。
その間の仕事は、まあ、副主任が引き受けてるはずですから――

シオン：アレンくん――――

――――

私、もしかしたら――KOS-MOS のことで、兄さんにあたってたのかな。

アレン：そうなんですか？

シオン：うーん、わかんない。だから、もっともっと悩まなくっちゃ。
その間、お言葉に甘えて、仕事よろしくね、アレンくん。

アレン：ええ、もちろんです！
（だから、悩みが晴れたら、ぼ、僕と――）

⇒ [サブストーリー9：アレン篇](#)

シオン：家で片付けようと思って、持ち帰ってたデータもあるんだけど、
全部、アレンくんのところに転送しておくわね。処理よろしく！

アレン：え、え、え――――

シオン：じゃあ、私――家に帰るね。

アレン：あ、あの、主任――

シオン：（――――

ありがとう、アレンくん――なんだか元気、出たかな。）

